

Title	欧洲戦乱期に於ける英仏両国大小農制度に関するアーサー・ヤングの研究 (其三完結)
Sub Title	
Author	福田, 徳三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.3 (1915. 3) ,p.232(10)- 254(32)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19150301-0010

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歐洲戦亂期に於ける英佛兩國大小農制度に 關するアーサー・ヤングの研究 (其三完結)

福田 徳三

目 次

- (三) 『佛國旅行記』の英佛比較論と佛國小農論
- (A) 『佛國旅行記』解題
- (B) 英佛兩國の一般的比較
- (C) 英佛兩國人口狀態比較
- (D) 英佛兩國農業收穫及收益比較
- (E) 佛國耕地制度の弊害
- (F) 結 論

(三) 『佛國旅行記』の英佛比較論と佛國小農論

(A) 『佛國旅行記』解題

『佛國旅行記』は千七百九十二年即ち大革命起りてより三年目に開板したるものにして千七百八十七・八十八・八十九の三年即ち大革命間際に至る時に於てヤングが佛國各地を巡歴視察したる結果を記述するものなり。ヤングの如き炯眼なる外國の視察者が佛國に取りて最も重要なる此時機に於て國の東西を詳細に視察研究し其結果を學問的に記録し置きたることは佛國に取りて最も幸なることにして、比較經濟史の研究者の感謝して已む能はざる所なり。此點に於てアダム・スミスの國富論が恰も米國獨立戰爭の際に成りしと好一對を爲すものと云ふ可し。されば『佛國旅行記』は幾多の問題に就て絶好の資料を與ふるものにして、殊にヤングは第一卷の卷末に『佛國革命論』一章を添附して、彼自ら視察記述したる所と革命との關係を論じ又た其將來の影響を考察したるが故に興味甚だ大なるものなり。さて『佛國旅行記』の題名は左の如し。

Travels during the years 1787, 1788, & 1789 ; undertaken more particularly with a view of ascertaining the cultivation, wealth, resources, and national prosperity of the Kingdom of France.

『佛蘭西王國の耕作、富、財源及國民的繁榮を確知するを目的として企てたる千七百八十七、八十八及八十九年に於ける旅行』

予が見たる所は千七百九十四年刊行の其第二版にして、全篇を二卷に分ち、第一卷を更らに二部とし、第一部にはヤングの旅行日誌を收め、第二部には系統的論述を載せたり。第二卷も亦之を二部に分ち、第一部は一卷に接續して系統的論述、第二部は伊太利及西班牙に關する斷片的記事に充てたり。本論に關係あるは主として第一卷の第二部なり、此部章を分つこと通じて二十一、其目左の如し。

- (一)面積 (二)地味及地面 (三)氣候 (四)穀物收穫地代及地價 (五)穀種輸栽 (六)灌漑 (七)牧場 (八)ルサーン (九)サンフォアン (十)インクロージュア (十一)借地制度及耕地の大小 (十二)羊 (十三)農業資本 (十四)食料勞働等の價格 (十五)佛國の地産 (十六)佛國の人口 (十七)穀物政策 (十八)佛國の商業 (十九)佛國の製造工業 (廿)佛國の税制 (廿一)佛國革命論

右の中小農制度論を就て窺ふには第十一章と第十六章とを重要なるものとす。

『佛國旅行記』は驚く可き精細の材料と鋭き觀察とを滿載する點に於て此種『モノグラフ・キー』的研究の白眉たり模範たり、此意味にてはマッケンジー・ウアレースの露國記に勝るものと云ふも不可なきものなり。ヤングが佛國研究に於て常に念頭に置きたるは英國との比較にして、而して兩國比較の點多々なる中に就て彼が最も重要顯著なりと認めたるものは其大小農制度の差違なり、從て彼は書中隨處に此問題に言及せり。されば『佛國旅行記』の全篇を通じて英佛大小農比較論は其最重要研究問題たりと認む可きものなり。

(B) 英佛兩國の一般的比較

ヤングは先づ英佛兩國の面積を比較する爲めに種種の算出法をあげ終に左の結果を以て最も眞に近きものとなせり。

英國面積	四六九一五九三三	エーカー
英蘭土	二六三六九六九五	
蘇格蘭土	二六〇四九九六一	
愛爾蘭土		

計

九九三三五五八九

佛國面積

一三一七二二二九五

エーカー

之に對して兩國の農業に用らるる資本の額は大約左の如しとなす。

英國

一エーカーに付

資本總額
百萬磅

英 蘭

四六

百萬エーカー

四磅

蘇 蘭

二六

三十志

三九

愛 蘭

二六

四十志

五二

計

二七五

佛 國

一三一

百萬エーカー

四十志

資本總額
百萬磅

即ち面積の上に於ては英國は佛國より少きに拘らず其農業資本總額の上に於ては約千三百萬磅多し英國の人口数は約千五百萬人にして佛國は二千五百六萬人なり從て英國の農業は佛國の農業に比して essentially richer and more powerfulなるを

知る可く而して while the two countries continue in their present situation, nothing can reverse this conclusion, but egregiously ill management in our own government なりとハヤングの主張する所なり。第一卷四百三十六頁 此事實はまた纏て最近二大戦後に於て顯はれたる著明の事實 the spectacle of England resisting successfully the whole power of France and Spain を説明するものにして世上往往英の植民地の大なること印度の征略等を以て其強點なりとすものあるは全然誤謬なり此は其強點に非ず却て弱點なり英國の強きは外にわらずして内に在り即ち the possession of near 300 millions sterling of active capital employed upon our lands is of quite another importance than that of such distant and brittle dependencies, or than any advantage that our boasted foreign commerce ever gave us なるを知らざる可からずと云ふ。四百三今茲千九百十五年ヤングの書を読み其主張を聞く英國に代ゆるに獨逸なる文字を以てするときハ言言刻下の活勢を説くものの如き感なくんばあらず英國が佛國に對して European hegemony を争ふの時に方其最も長所とし強點としたる所は其外に擴張したる力よりも其内に充實せるかにあり植民地の經營に於けるよりも其國內の農業の經營に充用せられたる富力にあり狭小

なる面積に集約的に累積したる農業資本こそ實に英國の持久力を支へたる根源なりしことをヤングより學ぶは豈に趣味ある事ならずや。佛國が其好敵手たる英國との角逐に於て漸く劣敗者たるの運命を免れざる所以は、其外に伸ぶる力の優劣によりて招致せられたるに非ず。國の富力、耕作、財源の涵養に於て劣るが爲なり。而して其然る所以は主として其の農業制度の悪しきことに之を求む可し。農業制度の悪しきが故に都會の繁榮著しく英國に劣り、商工業の發達亦後る。其争ふ可からざる證左は人口の狀態に就て徴するを得可し。即ちヤングは英佛兩國の人口狀態比較論を爲すこと詳なり。

(C) 英佛兩國人口狀態比較

ヤング曰く「佛國の人口狀態に就て奇異の現象あるは誰人も疑ふ能はざる所なり。即ち佛國に於ては、全人口の四分の一に満たざる人口が都會の地に居住するに過ぎざることは是なり。是は實に注意に値する事實なり。何となれば普通觀察する所又事實の教ゆる所として、凡そ繁榮する國に於ては全人口の半數が都會に住むを例とすればなり。多くの學者は英國の狀態實に此くの如しと主張せり。歐洲に於け

る最富國たる和蘭とロムバルディアとの二國に於ても恐らく同様なる可し。然るに佛國の都會人口斯くの如く少き其原因は其農業の實力と成效との欠乏より來れるものにして、予は佛國隨處に就て然るを認めたり。此事實と相伴ひて佛國の土地が極端なる小農に分割せられたるも亦預つて力ありとす。蓋し佛國の都會は實力微弱にして國の産業に animation and vigour を與ふる能はず。都會盛ならざれば農業産物に對する需要強からず。農産物の需要強からざれば國の産業全體に刺戟を與ふることも亦少し。佛國小農制度の弊害を明示するもの此一事より有力なるはなし。佛國は極端なる小農制度普及の爲め國民的進歩の原動力を沮害せられ其商業も工業も著しき進歩を成す能はず。The manufactures and commerce of the Kingdom must have made a less advance than one would have conceived possible, not to have effected a proportion far different from this of a fifth. A really active industry, proportioned to the real resources of the Kingdom should long ago have purged the country, of those superfluous mouths,——I do not say hands; for they eat more than they work; and it is their want of employment that ought to drive them into towns. 實に佛國には消費することと生産することよりも多き貧農民の多數あるが爲

めに國富の増進遅々たるなり、handsの名を與ふる能はず、mouthsの名を下さざる可からざる無爲無能の民多きは實に佛國の禍根なり。此等のmouthsは農業によりて國富増進に貢献するの望を有せず、然れば彼等は都會の工業に走りて存在の理由を見出す可きなり、然るに小農制度あるありて此自然的必然的轉遷を妨害す、從て貧農は益々貧乏を極むるも猶蠢爾として土に生れ土に死する憐れなる生活を持續し、つづつありて他方に都會の繁榮も亦進むに由なき状態を現出するなり、百以上四頁以下人あり佛國を巡歴してまさに巴里に入らんとす、其郊外を望視すれば宛として是れ砂漠の如く、倫敦の近郊の生氣を帯びたるに比較す可くもあらざるを感せん。the great resort, which is every where observable on the high ways of England, flows from the number, size, and wealth of our towns, much more than from any other circumstance. It is not the country, but towns that give the rapid circulation from one part of a Kingdom to the other; and though, at first sight, France may be thought to have the advantage in this respect, yet a nearer view of the subject will allow of no such conclusion. 十四頁入

ヤングは更らに英佛兩國都市の比較を爲して次の一表を掲ぐ

英國

倫敦

- ダブリリン
- エヂンバラ
- リヴァプール
- ブリストル
- ニューカッスル
- ハル
- マンチエスター
- バーミンガム
- ノーウッチ
- ヨーク
- グラスゴ
- バツ

佛國

巴里

- 里昂
- ボルドー
- マルセイユ
- ナン
- アール
- ロシエ
- ルーアン
- リオン
- ニーム
- サン・マロ
- パヨン
- ヴェルサイユ

倫敦とダブリンとの人口數の著しく優れる之を巴里、里昂と比較するは殆んど失當の觀あり、倫敦一市のみにて優に巴里、里昂、ポルドー、マルセイユ四市を合せたる人口を有す、而して英國の人口總數は千五百萬にして佛國の人口數二千六百萬なることを考ふるときは、以上優劣の差違は更らに驚く可きものにして英國の *valley* *greater activity* を有すること一の疑の容る可きなしと。

論じ來ること斯くの如くにしてヤングは歩を進めて曩きに『政治算術』に於て考究したる其人口論を更らに布演す。曰く、『經濟學の諸問題中人口問題ほど謬見の行はるるは稀なり、世上多くの學者は單に人口數多きを以て直ちに國の繁榮の證左なりとす、彼等謂らく *to enumerate the people was the only step necessary to be taken in order to ascertain the degree in which a country was flourishing.* 予は二十二年前十七百六『北英旅行記』に於て其謬見なることを指摘し、*no nation is rich or powerful by means of mere numbers of people; it is the industrious alone that constitute a kingdom's strength.* 人口數多きのみにて一國は富み又は強きにあらず、國の強みを成す所のものは勤勉なる人口、是れのみなることを主張し、千七百七十四年『政治算術』の書に於て、又た千七百七十九年其第二部に

於て其論を繰返して説述せり。サー・ジェームス・スチュアート其他の學者亦同様の説を樹てたるが、*イン・イン・シユヅアン* 氏は其 *Economie Politique moderne*, 1786 并に *Discours sur la division des terres*, 1788 に於て此問題を論盡して餘蘊を餘さず、佛國議會の『食糧調査委員會』の報告亦た同様の見解を執れり。予の見る所にては佛國の人口數は其産業の支へ能ふ以上に超過せり、佛國にして其人口を今より減ずること五六百萬なるを得ば、佛國は遙かに有力に、又た繁榮となる可きを疑はず。From her too Great population, she was presents, in every quarter, such spectacles of wretchedness, as are absolutely inconsistent with that degree of national felicity, which she was capable of attaining even under her old government. 然らば此の人口過剰の原因は何ぞや、答へて曰く *the division of the land into small properties, which takes place in that country to a degree of which we have in England but little conception.* 四百八なりと。然るに佛人之を悟らず却つて(一)結婚の奨励(二)移民の重視の二個の謬れる政策を喜びて、益々弊害を助長するのみ、此謬見を捨てざる限り佛國國富の増進は之を期す可からずと。猶此點に就ては拙著『改定經濟學研究』を看

6. Barley	
7. Clover	
8. Wheat.....	25
9. Tares, or Beans	
10. Wheat.....	25
11. Turnips	
<hr/>	
	75

6. Barley, or Oats	
7. Fallow	
8. Wheat.....	18
9. Barley, or Oats	
10. Fallow	
11. Wheat.....	18
<hr/>	
	72

即ち十一年間に英農は佛農に比し小麥三ブッシェル丈け多く收穫す。右を金額に換算するは、

English System

Wheat 75 bushels @ 5/1	£, S, d,
	18 15 0
Spring Corn, three	

French System

Wheat 72 bushels @ 5/1	£, S, d,
	18, 0, 0,
Spring Corn, three	

Crops at 32 bushels,

96 bushels @ 2/6	12, 0, 0,
------------------	-----------

Crops at 20

bushels, 60 bushels @ 2/6	
---------------------------	--

7, 10, 0,

Clover, two Crops 6, 0, 0,

Turnips, three Crops 6, 0, 0,

42, 15, 0,

3, 17, 8,

25, 10, 0,

2, 6, 4,

Per acre per year.

英國農業收益は一エーカー一箇年三磅十七志八片、佛國同上二磅六志四片の結果を得、兩國農業の優劣此一事に徴してまた多言の要なきを知るなり。

(E) 佛國耕地制度の弊害

ヤングの佛國耕地制度論は載せて第一卷第二部第十一章にあり。彼は佛國の耕作制度を考察するに五點ありとして、(一)小所有田制度、(二)金納小作制度、(三)封建的占地制度、(四)再小作制度、(五)受益農制度を挙げたり。而して曰く小所有田制度略して小

農は英國に於て到底想像だも及ばざる程度に於て國中に普及せり殊にケルシー
 ラングドック・ビレーン地方ベルンガスコアングエンの一部アルサス・フランス
 及ロレーンに於て甚しとなす。フランス・アルサス・ベルン等にては此等小農の狀
 態必ずしも悪からず、パヴレタニユに於ては富有を以て稱し得可きもの亦なきに
 わらず、然れども全體として見るときは、此等小農は皆極貧民にして、憐れなる生活
 を營み、諸子の間に土地を分割するが爲めに貧は益貧に赴く狀あり、其極端なる
 ものに至りては唯一株の果樹によりて生計を立つるものすらあるに至る。金納小
 作はピカーデーアルトア、其他に於て之を見る可しと雖も全體を通じて云へば佛
 國の五分の一又は六分の一に行はるるに過ぎず。封建的占地制度はブレタニユ、
 リモザン等に在りて、其農民の狀態は切迫せるものなり。再小作殊に小數者の獨占
 は分益農の行はるる地方に之を見る可く、分益農は佛國の土地の八分の七を占む
 る制度にして、其農民の生活は極めて悲惨なるものなりと。かくてヤングは三箇の
 問題に就て更らに詳論す、(一)分益の不利、金納制度の利、(二)大小農問題、(三)小農果して
 利ありや是なり。分益農に就ては曰く、四百

This subject may be easily dispatched ; for there is not one word to be said in favour of the
 practice, and a thousand arguments that might be used against it.

と。此點に於てケネーの主張する所全くヤングに同じ、今細論せず。
 さて第二、第三の問題を考究するに就て、ヤングは抑も國の立場より見て何を以
 て農業制度の適否を定む可き標準と爲す可きを論じて五項を擧ぐ、曰く(一)總收穫
 の多き農業を最良とす可し、(二)純收益多きを取る、(三)最も多數の人口を養ひ得る制
 度を最良とす、(四)農民の安寧幸福を標準とす、(五)市場に搬出し得る餘穀多きを最良
 の制度とす。彼は此五項を比較して(一)より(四)までは何れも最高の標準と成し難き
 を説き、比較的正しい標準は(五)なりとす。今此標準によりて見るときは、佛國に於て
 は、三百エーカー乃至六百エーカーの耕地單位を最も適切なりとす、然るに百アル
 バン乃至二百アルバンを平均とする佛國の小農は此標準に合はざる甚しきもの
 なり。從て The man is poor ; and no poor farmer can make those exertions that are demanded for
 good husbandry ; and his poverty is necessarily in proportion to the smallness of his farm なりと主張

せり。此弊を救ふの道は唯小農を改めて、土地肥沃なる所にては二百五十乃至三百

エーカー土地瘦せたる所にては四百乃至六百エーカーを以て經營單位と爲すにありと英國の實例は實に之を明證す。England has made, upon the whole, a much greater progress in agriculture than any other country in Europe; and great farms have absolutely done the whole 九頁然り然りと雖も予は法律を以て耕地の合併を強制せよと主張するものにあらず、予の主張する所は自由の一事のみ、I contend for nothing but liberty 同上予の主張は小農を維持せんとして法律政策を玩弄す可からずと云ふにあるのみ、此種論者は人民を以て唯だ兵丁の材料と爲さんとし、其多きを喜ぶは兵卒の數を多くし得るが爲めのみ、此くの如きは German despotism の空氣中に於てのみ存在し得可き、認見なり自由の新空氣を呼吸する國に一日も容るるを許す可からざる所なりと。

獨り經營單位に就てのみならず所有單位も亦た佛國の如く小なるは不可なりとは彼が第二段に於て論ずる所なり元より小地主制度に利益多々存することは彼の明かに認むる所にして、『所有は砂を黄金とす』とは彼の終始主張して已まざる所なり曰く

though the husbandry I met with, in a great variety of instances on little properties, was as bad as can well be conceived, yet the industry of the possessors was so conspicuous, and so meritorious, that no commendations would be too great for it..... I know of no way so sure of carrying tillage to a mountain-top, as by permitting the adjoining villagers to acquire it in property.

予は實にラングドックの山間地方に於て農民が自己所有地を開墾する爲め土を籠に盛りて山上に運ぶをさへ見たり、所有の魔力實に驚く可し然りと雖も佛國に於ける小所有は此等幾多の利益を滅却す可き大不利大弊害あるを奈何せん何となれば所有地は愈々小に分割せらるる結果經營單位は勢ひ亦極小となり之に伴ふ弊害を招致すればなり、四五十エーカーにては到底良き耕作を營む能はず、然るに之が更らに分割せられて二十エーカーとなり更らに分割せられて五となり二となり否一エーカーとなる、而して之に衣食を求むる家族の數は百エーカー田に於けると異なるなし、其貧は益貧となる當然のみ、かくして衣食の望なき人口は益益増加す、何となれば Complex marry and procreate on the idea, not the reality, of a maintenance

と何ぞ其言の痛激なる。而も其は而して誇張にあらざるなり。かくて distress and num-
bers of diseases が營養不足の結果として起る。之を要するに佛國に於ける土地所有
の分割は極端に失せり。故に大農の起るを人為的に防止せんとする一切の政策は
國を危殆に陥るものなり。 all measures which prevent the establishment of large farms, and
increasing wealthy farmers.....are ruinous to agriculture, and ought to be deprecated as a
system destructive of the public welfare と。四百十 是れ彼が所論の梗概なり。

(下) 結論

以上章を重ねてヤングの英佛農業比較に基く佛國小農論の大要を紹介し、また
多言を加ふるの要あるを見ず。元より十八世紀の終に於ける彼が研究は直ちに之
を二十世紀に移し來るを得ざるや勿論なり。唯だ吾人の忘る可からざるはヤング
の時佛國は其農業に於て、又た其商工業に於て、其都鄙の富に於て、英國に一步を輸
する状態にありしとは云へ、ヤングの書見はれて數年ならず、終に英國と大戦争を
開始し國を擧げて彼と對抗し、千八百十五年ナポレオンの敗北を見るまでは軍事
上并に政治上に於て互角の勢を維持したりしも、其後半世紀にして遙かに後進の

國なる獨逸と戦ひて終に敗者たるまでに退歩し、而して今茲千九百十四、五年の大
戦争に於ては唯僅かに白耳義の如くならずと言ひ得るまでの大退歩を爲したる
こと是なり。世人往往にして謂らく千八百七十年の役佛國は軍事に於て敗れたりと
雖も其後の財政政策に於ては寧ろ勝てりと論者は豫算上の數字は即ち國の實力
を言顯はすものと爲すものならずんば、あらず。然り佛國は戦後の財政を巧みに整
理し些の破綻をも生せしめざりき。而も財政家が其手腕を誇り、haute finance が外國
放資額の大を誇り、經濟論者が其貯金高の多きを誇り、つつわたりたる過去四十年の
間に於て獨逸と對等なりし佛國の國勢は漸くに下り行きて今や主客の地位を顛
倒するに至れるにあらずや。今日に於て獨佛兩國の比較を爲すものは亦た十八世
紀末のヤングが英佛兩國の比較を爲したると同一の筆法に出づること能はず。況
んや英佛兩國を比較するに於てをや。財政政策如何に巧妙なりとも、外交政策如何
に卓越なりとも、國の實力、國の富力、國の向上發展の力にして減却するときは果し
て何の誇る可き所かある。然り而して其原因の一が佛國小農保護の誤れる政策に
存すること誠にヤングが十八世紀末に於て主張したるが如きものありとせんか

世の美名に眩惑せられて小農保護を主張する學者まさに沈思熟考する所ある可
 きにあらすや他山の石以て我玉を磨く可し予は我邦の農政諸先生が三度思を茲
 に致し農會に於て農村に於て學會に於て議會に於て其小農保護論を高調大呼す
 るの前先づ膝を折り節を屈して予輩と共に暫くヤングの諸書を一讀通過するの
 閑暇あらんことを熱望せざる能はざるものなり。(終)

英佛獨諸國の戰時財政

堀 江 歸 一

歐洲交戰諸國の戰時財政計畫に就ては、小著「歐洲戰時の經濟財政」に於て、其一斑
 を叙述したりと雖も、元來同書は昨年十一月中旬入手したる材料に基きて、執筆し
 たるに止まり、當時英獨兩國に於て募集中の軍事公債、佛國の國防債券、英國の増稅
 計畫等に就ては、深く之を論究する能はざりき。本論は即ち其以後の材料に據て、前
 論の足らざる所を補はんとするものなり。

英國が開戰當時一億磅の軍事費支辨に就て議會の協賛を得るや、之に對する收
 入を調達する爲め、數回に亘りて九千萬磅の大藏省證券を發行し、外に英蘭銀行に
 就て若干の借入金爲し、以て財政の急に應じたり。今、大藏省證券の發行額並に條